

## 北方四島訪問記

埼玉県郷友会 会長 小津光由

### 1 はじめに

私はこれまで永い間、一度は北方領土に赴いてロシア側から日本を眺め、その実態を踏まえ、戦後長い間、日本とロシア(ソ連)両国間の大きな「トゲ」となっているいわゆる「北方領土問題」を考えてみたいと考えていたが、今回、その訪問団に加えていただき、国後島と択捉島を訪問することができた。以下、北方四島の現況や訪問間に折に触れ感じたことを報告、ご紹介したいと思う。

なお、北方領土問題の経緯については、その概要を文末に資料として添付しましたので参考のためにご一読ください。

### 2 北方四島の現況と交流事業および訪問団の概要

#### ○北方四島の現況

我が国固有の領土「北方四島」は、国後、択捉、色丹三島と歯舞群島とからなり、その総面積は5,036km<sup>2</sup>であり、千葉県とほぼ同じ広さである。また国後島、択捉島は沖縄本島より大きな島であり、とりわけ択捉島の面積(3,167km<sup>2</sup>)は沖縄本島(1,207km<sup>2</sup>)の2倍以上あることは一般の日本国民にはあまり承知されていないことではないかと思う。

四島の周辺海域はサケ、マス、蟹、昆布等の豊富な水産資源に恵まれ、一方島内は未開発の地域が多く豊かな自然環境が保全されている。また気候は、寒暖の差が比較的穏やかで、2月の平均気温はマイナス6℃前後、最も暑い8月でも平均気温は15℃前後と、典型的な亜寒帯気候である。色丹島と歯舞群島は比較的平坦な地勢の島であるが、択捉島と国後島には海拔1500mを超える山々があり、最高峰は国後島の爺爺岳(ちゃちゃだけ 1,772m)である。

戦前、ロシアに不法占拠される前、四島には、歯舞群島に約5,300人、色丹島に約1,100名、国後島に約7,400名、択捉島には約3,600名、計約17,300名の日本人が居住していたが、現在は、歯舞群島には定住人口が無く、択捉島に約6,100名、国後島と色丹島に約10,300人、計17,000名弱と戦前の日本人とほぼ同人数のロシア人が在住している。(2010年 ロシア国勢調査)

なお、現地との時差は日本時間+2時間である。

#### ○千島列島の戦略的価値とロシア陸軍の現況

東西冷戦時代に比べれば、ロシアにとって千島列島(クリル諸島)の戦略的価値はやや低減したといつてよいであろう。しかし、ロシア海軍太平洋艦隊にとっては太平洋進出の関門となる緊要な要点であることに変化はない。安全保障上から考えてロシ

ア軍部がこの四島返還に同意することは極めて難しいものと考えられる。

公刊資料(ロシアNOW「サハリンとクリルの軍事的整備」)によれば、現在千島列島には、陸軍部隊として東部軍管区に所属する「第18機関銃・砲兵師団」(編成人員非戦時 3,500名規模)が配置されている。極東地域の陸・海軍はともにその近代化が2010年から行われてきている。この方面における陸軍の配備の根幹は同師団である。ここ数年間で、その兵員数は増加し、T-80BVを擁する戦車大隊がその編成下に入ったとされる。同師団の主要戦闘用装備は次のとおりである。

- ・自走式高射機関砲ZSU「シルカ」 およびZU-23-2
- ・自走多連装ロケット砲BM-21「グラート」
- ・152mmカノン砲「ギアツイント」
- ・防空ミサイルシステム「トールーM2U」
- ・戦車T-80BV

なお、従来、交流事業としての訪問では、当然ながらロシア側軍事関係施設の視察実績は一切無く、また、今回島内では何度か軍人の姿を見かけたが、直接意見交換する機会も無く、軍事に関する具体的な現況をご紹介できないのは残念である。

#### ○北方四島交流事業

今回は、今年2回目の一般交流事業であったが、本事業は「北方四島在住ロシア人との相互理解を促進し、領土問題を含む日露間の平和条約締結問題解決のための環境整備」を図ることを目的とし、1991年(平成3年)、ソ連側から日本国民と四島住民との交流を行うことが提案され、翌1992年から旅券、査証(ビザ)なしの交流事業が始められたものである。これまでに日本側から330回、約12,500人、ロシア側から222回、約8,900人が参加している。(外務省資料「北方領土」2015年版)

本事業がこれまで双方合わせて550回以上も実施されていたことは初めて知ったことであるが、四島在住のロシア人の約半数がこれに参加したこととなり、かなりの成果を挙げているであろうことが推測された。

#### ○訪問団の概要

今回の訪問団は、団長、北方領土返還要求運動連絡協議会(北連協)事務局長の児玉泰子氏以下62名の編成で実施された。団員の内訳は次のとおりである。

- ・国会議員3名 (櫻田義孝氏、大塚耕平氏、鈴木たかこ氏)
- ・政党代表者1名 (鈴木宗男氏)
- ・NHK解説委員1名 (石川一洋氏)
- ・内閣府・国交省・外務省職員 各1名

- ・北連協推薦者28名  
（防衛省関係団体から4名参加（隊友会1名、父兄会2名、日本郷友連盟1名））
- ・元島民(2世)5名
- ・文化交流事業専門家5名（陶芸・造園・日本料理）
- ・その他 同行医師1名、通訳7名、北対協・北連協事務局職員等

#### ○訪問事業の日程等概要

9月14日、出発前に根室“ニ・ホ・ロ”にて「結団式」および「事前研修会」を実施  
 行程は9月15日から19日までの4泊5日(すべて船中泊)  
 利用する交通機関は交流専用船「えとぴりか号」 島内は乗用車  
 訪問先は国後島、択捉島の2島 全て団体行動(一部班別の行動)  
 訪問間に文化交流、日本人墓地の墓参、住民との交流(ホーム・ビジット 昼食交流会)、各種施設の視察を実施



「ニ・ホ・ロでの事前研修会」

### 3 根室港出港まで

#### ○根室市内にて・・

14日(水)、午後、中標津空港からバスで根室市内に入った。ふと気が付くと市内の交通標識のすべてにロシア語が併記されていて、思わず「ロシアが近くなった！」という感じを抱いた。また、市役所屋上はじめ市内多くの場所に北方四島返還要求のスローガンが林立している。ここは四島返還運動の中核の場所でもある。

午後から「千島会館」において北連協主催の研修会がありこれに参加した。団長の

児玉氏から団員に対し訪問の心構え、および役割分担と島内の行動上の諸注意について説示があった。

研修終了後、ホテルにチェックイン、夕食後は俄か勉強でうろ覚えのロシア語会話を復習しつつ就寝。

少し余談になるが、ロシア語には「ダー」(はい)、「ドーブラエ ウートラ」(おはようございます)、「ダスビダーニャ」(さようなら)、「ズドラーストビチェ」(こんにちは)「スパシーバ」(ありがとう)、「パジャールスタ」(どうぞ)というように「ガ」「ザ」「ダ」「バ」行の濁音が日本語に比して非常に多い感がある。それはスラブ系ロシア民族の持つ資質を顕在化したものとも考えるが、如何にも攻撃的で威圧的な感じがする。日本語のような優しさ、たおやかさを感じられない、と思うのは私一人であろうか。



「根室市役所屋上に掲示されているスローガン」

### ○事前研修会

15日(木)、天候は晴れ、気温17度。0830千島会館に集合後、バスで「道立北方四島交流センター」愛称「ニ・ホ・ロ」(ニホン・ホッカイドウ・ロシアの頭文字から名付けた愛称)に移動し、北対協主催の事前研修会に参加した。同センターが恐らくは根室市で最大の立派な施設であることに少なからず驚いた。また、同時に四島の返還運動にかける国と関係者の並々ならぬ熱意をも感じることができた。

研修会では、長谷川根室市長のあいさつの後、団員紹介、四島についてのオリエンテーション、続いて元島民の鈴木咲子氏の講話、ロシア語講座等を受講した。

研修会終了後、根室港に移動、「交流専用船 えとぴりか号」に乗船、夕刻多くの方々の見送りを受けながら1600に根室港を出港した。

我々が乗船した四島交流船「えとぴりか号」であるが、国が四島交流の目的に建造した専用船で、総トン数1,124トン、全長 66メートル、最大搭載人員 旅客 84名

乗組員 12名 航海速力 15ノットの客船である。根室—国後(古釜布)間を約2時間50分で往来することができる。船内客室は全部で19室。私は201号室へ。同室の仲間は、父兄会の宮下氏と小野氏、隊友会の榎本氏、それに海自OBの伊藤氏と今回の文化交流で陶芸の指導をする大上氏の計5名であった。経歴の様々な6人がこれから5日間、同室で一緒に生活することになった。

出港後、波は比較的穏やかで順調に進み1930頃には国後島古釜布の沖に到着した。夕食後、船内食堂で同行の団員の皆さんと懇談、船に酔う前にお酒に酔って早めに就寝。



「交流船 えとぴりか号」

#### 4 国後島訪問

16日(金)、天気は晴れ。朝食後、国後島への入域手続きを実施、ロシア側からの“はしけ”に移乗して予定通り0900頃に上陸。島民の借り上げ乗用車に分乗して「友好の家」に移動した。乗用車のほとんどが日本車であった。

えとぴりか号は直接入港し、岸壁に接岸、停泊できない。その理由について、質問したところ、「港湾内の海図が公開されていない」とのことであった。しかし、これは未確認で私の推測であるが、四島が日本固有の領土であることから、仮にロシア側に対し船舶の入港申請をすればロシアの実効支配を認めることになり、その建前上実施できないのではないかとと思われる。

午前中は、2個グループに分かれて行動。われわれのグループは「古釜布の日本人墓地」に向かい、全員で焼香し、多くの先人のご冥福を祈った。墓地が平素十分な維持管理ができず、かなり荒れていることに胸が痛んだ。

墓参を終えて車で移動途中、左側の荒れ地に一両の装甲人員輸送車が放置されているのを目にした。一瞬、軍の警戒配備中の車両かとも思ったが、よく見るとどうも

老朽化により廃棄された車両のようであった。少し走った先でも軍の廃棄トレーラーが路傍に捨てられており、軍の兵器管理の杜撰さと情報保全の意識欠落が大いに気になった。



「歓迎行事で民族衣装の女性」

次に「博物館」次いで「ロシア正教会」を視察したが、移動する車中で、島内の道路に交通信号機が全く無いことに気が付いた。後で聞いたことであるが島民には自家用の乗用車が必要不可欠であるが、島内では住宅等、人工物の密集地はほとんど無く、また車の数もそう多くは無いことから、交通安全上も信号機は当面不要ということであった。これは択捉島も同様であった。二島の現状を説明するとき「交通信号機の無い島」という説明が現地を理解してもらう手っ取り早い話かもしれない。

「友好の家」に戻り昼食後、近くの商店の視察(買い物)をした。魚介類の干物や缶詰類は種類も豊富であったが、生鮮食品類は島内ではほとんど取れないことから種類も少なく、これでは島民から不満が出るのではないかと思った。これも後から聞いた話であるが、多くの島民は自宅周辺で温室や畑を造り、野菜やフルーツを栽培しているとのことであった。

その後、再び「友好の家」に戻り、現地のソロムコ「南クリル」地区長をはじめとする皆さんとの夕食交流会を実施した後、1600頃に帰船した。

船は夜間のうちに国後島を離れて択捉島に回航され、翌17日(土)は島に上陸し研修の予定であったが、生憎の悪天候により波が高く、はしけが使用できず上陸を断念、終日、択捉島内岡(なよか)港沖で船内待機となった。

## 5 択捉島訪問

### ○ようやく上陸へ

18日(日)、天候が回復、0630はしけに移乗し待望の択捉島に上陸、新築の「スポーツ会館」に移動した。映画の上映も可能な大きなホールで団長とベロウソワ地区長との会見、記念品(掛け軸)の贈呈が実施された後、全員で「紗那墓地」に向かい、焼香、慰霊した。同墓地は国後の日本人墓地に比較すれば手入れがされていた。聞けば、ロシア人の墓地も同地域に沢山あり、ロシア人の皆さんも草取り等の手入れをしてくれているとのことであった。墓地にて、ここで戦前に亡くなられた同朋の方々と、そして今、自由に先祖の墓参さえ困難な元島民の皆さんの切実な思いを痛感した。

引き続き、日露の文化交流事業として「陶芸」「日本庭園」の手入れの二つのプログラムが実施された。私は「陶芸教室」のお手伝いをしたが、たくさんの親子が参加し、とりわけ四島の子供たちには陶芸をきっかけとし日本文化に対する興味を持つ良い機会になるであろうと感じた。



「紗那日本人墓地」

### ○ホーム・ビジット

1100頃から約2時間は13個のグループに分かれ、現地のロシア人のお宅への「ホーム・ビジット」が組まれていた。我々のグループは4人で現地の病院で看護師をされている「ヴルブレスカヤ・アンナ・アルカジェヴナ」さんのご自宅を訪問した。彼女の家は旧日本名「別飛」地区の海岸沿いにあった。簡素な木造平屋建てのご自宅は目の前が太平洋の大海原、家の前には「津波に注意」の標識が立っていた。また別飛地区の多くの道路は未舗装で、砂地なのでこぼこ道路で車はゆっくりとしか走れない。

形ばかりの小さな門扉を開けて庭に入るとどこかで見たことのある種類の犬が出迎

えてくれた。あの「人工衛星・スプートニク」に乗ったライカ犬である。家は3LDK、リビングルームは14畳程度であった。居間のテレビとオーディオは日本製、ベッドルームとキッチンが比較的広くやはり10畳程度であった。敷地の別棟にサウナ部屋があり、まきを燃料にして蒸気を作り入浴すること、また大きな鶏小屋があり30羽ほどの鶏が飼われていた。



「文化交流 陶芸教室」



「ホーム・ビジット訪問先にて」

当日、迎えてくれたご家族は、ヴルブレスカヤさんとご子息の奥さん、それとお孫さんの5歳の男の子の3人であった。たくさんのごちそうを準備していただいて、それらを食べながらの懇談であったが、印象に残ったのは次のようなことであった。

- ・祖父母が島に定住してから孫で4世代目になること
- ・島には大学は無く、現在彼女の娘さんはウラジオストクの大学に在学中
- ・住民の平均的な月収は5万ルーブル程度(日本円で約11万円程度)  
特別の資格を持っているものは7万ルーブル程度
- ・これまで津波の被害を受けたことは無いが、冬は風が強くて海岸の砂がたくさん吹き寄せられてきて、その対応が大変であること
- ・島では日本の島嶼地域が抱える問題と同様に、若者の仕事が少なく定着せずに島外に出ていくものも多いこと
- ・交流事業で彼女も北海道に来たことがあり、日本の実情について多くのことを承知していること
- ・交流事業に参加した多くの島民は日本に対して好意を抱いていること

以上、短い時間では有ったが、島民の生活の実態を垣間見る良い機会となった。

#### ○別飛水産加工場およびヤスニー空港見学

ホーム・ビジットの後、団員全員が合流し、別飛の水産加工場を見学した。海岸沿いに建設された施設は近代的な加工機械を導入し24時間体制で主としてサケマス等と加工をしているとのこと。水産物の加工工場は島のいわゆる基幹産業であるが、就労の人員は現在150名(一日で300名が就労)ということであった。また、作業の内容から、この仕事は女性向きではないかと思ったが、当日、工場で働いているのはほとんどが男性であったのが意外であった。



「別飛地区 水産加工工場」